

つばさ保育園「審査委員特別賞実践提案研究会」 開催レポート

2021年2月6日（土）、2019年度「ソニー幼児教育支援プログラム」で「審査委員特別賞」を受賞したつばさ保育園による、「審査委員特別賞実践提案研究会」を開催しました。新型コロナウイルス感染防止のためZoom ウェビナーによるオンラインで実施いたしました。南は沖縄県から北は北海道までの認定こども園・幼稚園・保育所・小学校・中学校・大学等の教育・保育関係者から異業種の方も含めて約120名（端末数）の参加がありました。

以下につばさ保育園による開催レポートを掲載します。

発表会概要

1. 日時：令和3年2月6日（土） 9：30～11：30
2. 主題：「科学する心を育てる」～自分の思いを表現し創造する楽しさを形に～
3. プログラム
 - 1) 開会式・実践発表 9：30～10：05
 - 2) 協議会（質疑応答） 10：05～10：15
 - 3) 記念講演 10：20～11：20
演題：「科学する心を育てる保育」
講師：玉川大学教授 大豆生田 啓友氏
 - 4) 閉会式 11：20～11：30

研究発表

研究主題《科学する心を育てる ～自分の思いを表現し創造する楽しさを形に～》

本園では、保育者は子どもたちが『今』どんな事を感じ、気づき、楽しんでいるか？という視点から、一緒におもしろがりながら、一人一人のつぶやきに共感し、丁寧に寄り添うことを大切にしている。そして、5歳児になると遊びの経験の積み重ねによって、試行錯誤の段階で多様なアイデアがいくつも生まれる。失敗も新たな気づきであり、いくつもの仮説を立てて実行、成功体験を仲間同士で感じることで、より深まりを求めたり、意欲を高めたりすることへと発展すると考えている。

当日は、子どもたちが試行錯誤している様子を、写真を多く取り入れながら実践発表した。卒園間近の自由遊びから始まった活動。いつもはあまり交わらない4名の女兒たちが自分たちで考えたロケットの設計図を基に、室内にあるあらゆる材料を使ってロケット作りを楽しんでいたが、なかなか自分たちの思い通りには進まない。やがて、個々の関心がクラスの関心事へと広がり、「本物のロケットをどう作っていくか？」をクラス全体で試行錯誤していく過程が協同的な学びとなっていった。さらに、実際にロケット打ち上げの映像を見て気づきを共有したり、写真や子どもたちの声を具体的に書き、ドキュメンテーションとして保育を可視化したりすると、子どもたちは自分の意見や思いを共有していくようになった。

保護者も巻き込み、子どもたちの願いが園の枠を超えて、みんなの願いへと繋がっていったことも大事な環境の一つとなった。また本物に触れる経験として、地域の施設に出向いたことも、子どもたちの興味の世界を広げることに繋がっていった要因となっていく。子どもたちの心の根底にあった「空飛ぶロケットを作りたい」思いを実現させる為にペットボトルロケットキットを購入し、飛ばしてみることにしたが、安全面を考慮し、水無しで行なったことが大失敗を招く。しかし、この大失敗は、「どうすれ



※公益財団法人ソニー教育財団より提供された写真です。つばさ保育園



開催直前の様子

ば飛ぶのだろう」という子どもたちの探究心を刺激し、これまでの遊びの経験がヒントとなり、ロケットと向き合い、「水の力が必要！」と結び付いた。こうした経験を基に、実験を重ね、さらに水の量や空気を入れる速さ、飛ばす方向にも着目しての探究となり、卒園間近まで本気で楽しめた活動となった。これらの実践から子どもたちの興味・関心がそれぞれであることを受け止め、本気で取り組む思いに保育者も本気で応じていくことの大切さや、これからも日常の遊びの積み重ねを大切に子どもたちと向き合っていきたいと考えている。

協議会（質疑応答）

事前に、参加者に受賞論文及び発表資料について、予め質問を受け付けた内容を当日 Q & A の形でお答えした。また、研究会終了後アンケートにて質問を受け付けここにお答えを掲載する。



<事前のご質問にお答えして>

Q1: 人的・物的環境に視点を置いたときに、子どもの興味、関心を継続させていくためにどのような工夫をされていましたか？

A1: 棚を置き、作った物を飾ることができるようにすると、そこが子ども同士のコミュニケーションの場になり、興味・関心が持続していくきっかけとなりました。棚の横に廃材ボックス、製作コーナーを設置し、場を工夫し、じっくり作ることができるように時間の保障をしました。

Q2: 子どもたちが空き箱やゴムなどを使ったロケットを作っている中、市販品のペットボトルロケットを取り入れるというのは、思い切った決断があるように感じました。思いを聞かせてください。

A2: 身近な素材で作る・飛ばすということでしたのでとても悩みました。しかし、今までの経験の積み重ねが十分にあるからこそ、この探究の深まりがあるのだと感じ、最後は子どもたちが、当初からイメージしている本物のロケットのように迫力のあるロケットを見たい思いを叶えてあげたいなと思いました。また、それぞれの家庭でも「ペットボトルロケットがあつてすごく飛ぶ」と話題にあがるようになっていて、子どもたちも思いは共通なのかもしれないと感じ決断しました。

Q3: 論文の「今後の方向性」の中で、自分の思いが先行してしまうこと、保育者が思う年長さんらしさを求めてしまったこととありましたが、偏りに気づいたことにはどのような過程があったか、話し合いの過程も教えてください。

A3: 自分が思い描く 5 歳児の姿と、実際に目の前にいる子どもたちの姿とのズレ(違和感)を感じた時に、あれ？今、自分よがりな保育になっていないか？と感じました。それは、自分の保育を振り返った時に、私がこうなったらいいなと思い描いた方向に向けようとしていたのだと思います。そのことを反省し、目の前の子どもたちの今、関心のあること、やってみたい事を丁寧に寄り添い、関わることを大切にしていくと、自分自身の保育も見方も自然と変わってきたような気がします。

また、様々な保育者間で子どもたちの育ちを分かち合いたいと考えています。例えば、園庭でモノとじっくり関わり合っている時、友達と一緒に試行錯誤している時、子どもたちは何を感じているのか？子どもの遊びの妨げにならないように話をし、会議の場でも、語り合う姿勢を大切にしている所です。目の前の子どもたちの姿から、共感性をもって寄り添う、関わり合う同僚性が大切だと感じています。

Q4: 卒園間近、途中からクラス活動になった流れを教えてください。

A4: 1月末、自由遊びのなかで4人の女の子が楽しんでいた遊びでした。設計図に書いてあるようなロケットを作りたいけれどもうまくいかず、周りには友達も気にかけている様子。それを見て、仲間アイデアをもらって見たら？と投げかけ、女の子たちがクラス全体の話題にしたことから、少しずつクラスの活動へと変化しました。

Q5:本物に出合うタイミングや投げかけなど、日頃がどのような感じなのか教えてください。

A5:遊びの様子・経過を見ながらも、今実体験できたら、より探究が深まるかもしれない！と感じた時や、調べていく中でこれは実際に見て、触れて、感じる事が大切だと思った時、そのタイミングを逃さない様に、日々子どもたちに寄り添いながら関わっています。その経験が、より子どもたち一人一人の感じ取り方により、活動の幅の広がりや、新たな気づきに繋がるのではと考えています。また、みんなで体験したことは、共通体験となり、思いを共にできることも大切なことと感じています。

<終了後のアンケートにお答えして>

Q1:ドキュメンテーションを保育日誌と捉えているか？日々の保育事務をどうしているか？について。こどもと一緒に過ごす時間と事務との時間のやりくりは保育園でも課題だと思っています。研究内容とは違うと思うのですが、お聞きしたいです。

A1:現段階では、保育日誌と捉えていません。将来的には保育の向上のためにも、保育日誌と捉えていければと考えています。もっと共有できる保育日誌にできればと模索中です。

Q2:先生方の保育が楽しい…面白いと思うようになってきているのは園がスタートしてからずっとそういう状況を維持しているのか、それともそうなるまでのご苦労があったのですか？

A2:開園当初から、職員同士エピソードを話し合いながらお互いの意見や思いを忌憚なく言い、聞きあう雰囲気がありました。しかし、お互いの思いが違うこともあり戸惑うことも多々ありました。そこで様々な意見もあると受け入れながら、次第に職員同士面白がっていく雰囲気を徐々につくっていきました。今でも戸惑いはありますが、違う意見にも面白さを見出し、子どもたちがやっている面白い事を他クラスの保育者と見守りながら共有する中で、“私も楽しいみんなも楽しい”と進化し始めています。新しい職員には、その状況を仕事や休憩中等に伝えながら共有しています。

Q3:ロケットへの興味はどこからきたのか？を知りたいです。先生の思いをもう少し具体的に聞きたかったです。

A3:これまで、宇宙ロケットに関連した遊びは見られなかったのも私初めは驚きました。一人の女の子と兄との話題(図鑑を持っていて見たことある!)がきっかけです。ちょっとしたエピソードが遊びの始まりでした。

Q4:ロケットの発想を探究できる幼児の姿は、乳児保育の積み重ねがあってこそ。乳児保育にとって大切にしたい「科学する心」を、つばさ保育園ではどのように考えられているのか？

A4:子どもの気づきをいきなり制止したり、うっかり先取りして声をかけたりするのではなく見守り、いたずらも共に楽しむように心がけています。制止する前に“こんな発想があるんだ！”と思い、関心をもってすることはできるようにする。保育者が考える活動も多様性をもって体験できるようにしています。

Q5:つばさ保育園の保育室内の廃材の置き方(分類や配置場所など)やその工夫、ねらいを知りたいです。

A5:大きい段ボールを部屋の前の廊下に置き廃材を分類し収納できるようにしました。

(廃材:段ボール・お菓子の空き箱・飲み物のパック・画用紙等)

廃材に合った道具もいつでも子どもたちが自由な発想で使えるように準備しました。

(道具:ガムテープ・セロテープ・油性ペン・ボンド・のり)扱える子どもには、ハサミも常時出せるようにしています。アレルギーの子どもへの配慮を伝えながら保護者の方にも協力してもらい廃材を集めています。乳児の時は保育者が作って見せたり飾ったりも大切にしました。子どもたちが自由な発想で作り、思ったことや描いたことを、試行錯誤しながらも実現し、創造力が広がるようにという願いが根底にあります。また、誰かに見せたいという気持ちから家に持ち帰ることで、園での遊びや子どもたちの様子が伝わるようにもしています。



記念講演

大豆生田啓友氏/玉川大学教授

「科学する心を育てる保育」を演題に、玉川大学教授の大豆生田 啓友氏による記念講演の講演内容を以下にまとめる。

はじめに、本園の研究発表の論文や写真から、自分の思いを表現する子どもたちの姿の大切さやドキュメンテーションを保育に取り入れて行っている事を関連させながらお話しを頂いた。子どもたちが楽しんでいる遊びは、異年齢の繋がりによって自然の関わりの中で形成されているものが多く、そのように伝承されていく文化的実践を、遊びの中で思う存分保障されていることが、大切なこととお話しされた。また、空き箱や廃材などを利用した（可塑的材料の豊かさ）モノづくりの文化があること。それが科学へのつながりに通じることと関連付けて頂いた。また、4人の子どもたちからはじまった関心ごとが、クラスみんなの関心ごとに広がっていくことは、【本物のロケットをつくりたい】という子どもたちの思いである。さらに、その遊びを共有するためにドキュメンテーションとして子どもたちの声を丁寧に拾い子どもたち自身が思いを共有していくこと、更に可視化することで、保育の意図が見えてくる。また子どもたちの活動が保護者にも広がり、みんなの関心事へと繋がる。子どもだけが主体なのではなく保育士も主体、家族も巻き込んで地域へと広がっていく。私たちの仕事（保育）と社会はつながっていると述べられた。

つぎに、他園の実践を交えて多様性について、いろいろな子どもがいてその良さをどう活かすか。活かされることによって他の子どもに影響を受け周りに広がっていくこと、その時に子ども自身の自尊心にもつながっていくこと、遊びの中で非認知能力が同時に起きていること、子どもたちの遊びを環境で支えることや自然の中での子どもの豊かな育ちについて解説頂き、科学する心の7つの視点から日常生活の保育者の言葉掛けや、満足が満ち溢れることで生活が豊かになるとお話しいただいた。

最後に、園を持続可能な社会づくりの拠点にということで、保育の現場は、以下の3つの可能性を有していることを述べられた。

- ヒトが進化してきたのは、他者への共感だった
- ヒトは地域の群れの中で共同で子育てを担ってきた
- ヒトは自然を畏れ自然との共生の中で生きていた

現代は、この3点が崩壊し深刻な状況であるが、今後、保育園は持続可能な社会づくりの拠点としての役割が、期待されると結ばれた。

